

出雲神話版「七福神」の掛軸

飯能市立博物館 学芸職員 村上 達哉

この掛軸は、円泉寺掛軸(註)のひとつです。印刷の様子から、おそらく明治時代以降のものと思われ、裏面には黒字で「出雲大社」、その脇にやや小さく朱字で「七福神」とあります。

七福神というと、恵比寿・大黒天・弁財天・福祿寿・寿老人(吉祥天の場合もあり)・毘沙門天・布袋和尚の組み合わせが一般的です。本資料は一見すると記紀神話の神々が並んでいるため、「七福神」の掛け軸とした場合、奇異に感じます。しかし良く見ると、中に恵比寿神(えびすがみ)と大黒天がいます。描かれた神々に何か法則性が見いだせれば、「七福神」の理由が分かるかもしれません。

恵比寿神の脇には、「事代主命」(ことしろぬしのみこと)と神名が印刷されています。この神は託宣の神です。元来、出雲の神ではないのですが、出雲神話にも登場し、『古事記』では、国譲りを求める高天原からの使者に対し、従順に国譲りを誓い身を隠しています。事代主命は釣好きであることから、恵比寿神に擬せられているとも言われ、まさに本資料で表現されているところです。事代主命は大国主神(おおくにぬしのかみ)の息子ですが、本資料では事代主命の上に大国主神があり、親子で並んでいます。大国主神は大黒天の姿で示されていますが、これは、「大国」と「大黒」の字音が同じであることから、大国主神が大黒天と習合した(異なる複数の神仏が同一のものと見做された)為です。



図1 出雲神話版「七福神」

他には、伊弉諾尊(いざなぎのみこと)・伊弉冉尊(いざなみのみこと)の夫婦神があり、この二柱の神は、国生みを行った神です。天照皇大神(あまてらすすめおおかみ)と素戔嗚尊(すさのおのみこと)は、黄泉国に行った伊弉諾尊が禊をして生まれしました。素戔嗚尊は、八岐大蛇(やまたのおろち)退治の後、出雲国に住み、その子孫が大国主神です。素戔嗚尊は、元は出雲系氏族の祖神とする説があり、大国主神共々出雲に縁の深い神といえます。少彦名命(すくなびこなのみこと)ですが、この神も出雲神話に登場する神で、大国主神が出雲の美保の岬にいた時、海からやって来た小人の神です。大国主神と共に国造りをしました。

以上のことから、本資料は出雲神話版の「七福神」が描かれた掛軸と言ってよさそうです。

註 市内の円泉寺からご寄贈いただいた、妙見信仰研究の過程で収集された日本各地の寺社の掛軸。

【引用・参考文献】

川口謙二編著 1999 『日本の神様読み解き事典』(柏書房)

次田真幸 1977 『古事記』(上)(講談社)

【お知らせ】

収蔵品展「ナミホン」家伝来の資料・令和6年度新収蔵品展 3月16日日曜日から5月11日日曜日まで